

# 「自分」と「働く」を重ねる 高校事例

型にはまらない職業観を育成するために、各校ではどのような取組を行っているでしょうか。  
生徒が「働く」を自分ごととして捉えて将来に向かえるよう、  
学校外でのリアルな体験や活動を充実させている3校の事例をご紹介します。

Case

1

## 2040年の未来を思い描き、 「問い」を磨いて臨む探究型インターンシップ

高崎北高校（群馬・県立）

学校データ

1979年創立／単位制普通科／生徒数710人(男子380人・女子330人)／2003年群馬県初の進学重視型単位制高校に。  
8割以上の生徒が国公立大学進学を目指している。

### コンセプトは 「仕事の未来を探究する」

進学重視型単位制高校の高崎北高校は、1年次に全員参加による探究型のインターンシップを実施している。

同校は5年前より、総合的な探究の時間にて「Will:自分の興味・関心」「Needs:地域社会・周りの課題や必要あること」「Academic:学問のつながり」の3要素を核とする3年間の探究プログラムを展開している。1年次は「自分を知る・学びを知る・社会を知る」が目標で、インターンシップはその中心的な活動だ。「2年次での探究活動につながる重要な第一歩」と、あらざ探究推進部長・志村克樹先生は話す。

同校のインターンシップのコンセプトは「2040



写真左から、あらざ探究推進部の吉永明生先生、部長・志村克樹先生、森田直樹先生。

年の仕事の未来を探究する」。生徒が働くことになる社会をイメージしながら、興味のある仕事の未来について課題と仮説を設定し、実際の職場で仮説を検証する。

「自分なりの問いをもって取り組む点が、中学校で行う職場体験とは大きく異なります。単にその仕事の内容ややりがいを知るだけでなく、



表現力、課題設定能力・仮説検証能力・コミュニケーション力、キャリア意識の育成を目指しています(図1)」(志村先生)

## インターンシップ先の約6割が生徒による開拓

11月のインターンシップに向けた準備は1学期から始まる。最初の活動は、各自のWillに基づいたインターンシップ先を決めることだ。生徒は、学校が開拓したリストから選定するか、生徒自身で新規開拓する。2つの方法に優劣はつ

けていない。重視しているのは、Willに基づいて主体的に決めることだ。そもそもどんな業界や企業があるのかわからない生徒が多いため、企業情報データベースや経済団体のWebサイトなどを活用して企業調べから始める。

「生徒には先輩の実績を紹介し、自由に決めてよいことを伝えます。『先輩がやっているのだから自分にもできるはず』という意識になり、『こんなところに行ってみよう』と目を輝かせて探すようになります」(吉永明生先生)

そのなかで自己開拓の数は年々増加。2024年度は協力事業所162件のうち自己開拓は約6割。東京や静岡、広島など県外の企業も開拓した。

そして、協力事業所へのアポイントメントは、学校が作成した共通の実施要項を用いて、生徒が直接行う。162件すべてを集めた事前説明会は現実的ではないため、教員による5分程度の趣旨説明動画を作成し、その視聴を通じ、目線合わせを行っている。

図1

インターンシップを通して育成したい資質・能力

- ①2040年のインターンシップ先の仕事の未来をプレゼンテーションできるようになる【表現力】
- ②自分なりの問いを立てられるようになり、インターンシップ中のインタビューで検証できるようになる【課題設定能力・仮説検証能力・コミュニケーション力】
- ③「学びたいこと(興味・関心)」と「仕事」とのつながりをイメージできるようになる【キャリア意識】

図2

探究型インターンシップ日誌



問いつくりやインタビュー質問事項の整理などの事前ワーク、当日の記録シート、ルーブリックなどを収録。

## 企業のWill・Needsも踏まえ自分の問いをつくる

次に、2040年の仕事の未来についての「問い」の設定に取り組む。「どんな問いをもって臨むかでインターンシップでの活動内容が変わってくる」と吉永先生。その重要性は生徒に繰り返し伝え、意識づけているという。

問いつくりの起点には、「自分のWill：そのイ

ダウンロード可

※ダウンロードサイト：リクルート進学総研 >> 刊物 >> キャリアガイダンス (Vol.454)

インターンシップ先に決めた想い・理由」「企業のWill：その企業の理念や社会的価値」「企業のNeeds：その企業が社会から求められていること」の3つを置いている。しかしながら、多くの生徒は企業のWill・Needsを挙げるだけの知識がない。まずは図書館の新聞で関連する記事を探し、インターネットの情報を調べ、企業・業界の状況を知ることから始める。

そのうえで、ワークシートに沿って問いづくりを行う(図3)。まず、前述の3つを掛け合わせた「自分Will×企業Will」「企業Will×企業Needs」「自分Will×企業Needs」にある、小さな疑問をできるだけ多く挙げる。それらを3つのサブクエストン(SQ)にまとめ、さらに全体を貫くメインクエストン(MQ)を一つ設定するという流れだ。

実際に先輩が作成したMQを例示しながら、「一般論ではなく自分のWillが入っている」「個別企業ではなく業界全体に言及している」「社会課題を踏まえている」「自分なりの仮説がある」など良質な問いの特長を説明(図4)。ワーク中は教員が教室内を回って「これはどういうこと?」などと質問し、問いを磨く支援を行う。そうして、例えば「2040年の保育園は、保育士の人手不足や未就園児の受け入れなどの社会課題をどのように解決し、どのように自己表現のできる子どもに育てるのか?」といったMQをつくる。「壮大な問いを設定し、その答えがインターンシップだけでは得られないことも多々あります。実態とのギャップに気づくだけでも、その職業や業界への固定観念を打破する良い機会になるのではないのでしょうか」(森田直樹先生)

図3 私の「問い」作成ワーク

図2の日記の一部。「自分のWill」「企業のWill」「企業のNeeds」の重なる部分から小さな問い・疑問を挙げ、MQとして集約していく。

図4 メインクエストンづくりのコツの説明資料より

前年度の生徒が作成した「問い」の文章を分解して、自分のWillや社会課題がわかるポイントを示している。

## 職場インタビューを行い 仮説を検証する

3日間のインターンシップ中の活動内容は各事業所によってさまざまだが、従業員へのインタビューは必ず依頼している。生徒は事前ワークでMQ・SQを基に質問を準備し、相手の話を引き出す工夫をしてインタビューを行う。

インターンシップ終了後は、仕事の体験やインタビューで学んだことを踏まえて仮説の検証を行



生徒のインターンシップ先は多様な分野の企業、市役所、医療機関、学校などさまざま。写真はラジオ局（上）と産婦人科（下）の様子。



インターンシップ報告会は少人数に分かれて実施。受け入れ企業・団体の方と2年生も評価を行う。

う。その内容は資料にまとめ、報告会で発表する。報告会には、2年生のほかインターンシップ先の方も招き、ルーブリック評価やコメントをもらう。

「学んだことを表現して他者に伝えることは、本取組のポイントの一つ。校内だけでなく、外部からも評価を得ることを重視しています。資料作成や発表方法は細かく指導しないのですが、生徒はそれぞれで工夫して、お世話になった方を前に緊張しながらも嬉しそうに発表します」(吉永先生)

## 仕事に対する見方の刷新や肯定的な社会観に手応え

こうした探究型インターンシップから生徒が得るものは、体験の充実感や満足感だけではない。実施前と後の生徒アンケート結果を比較すると、「自身の人生への興味」「人生を自分の力で切り拓いていく意欲」「希望する生き方に向けた学習意欲」など、さまざまな項目のスコアが上昇している。

### 図5 生徒アンケート「インターンシップをきっかけに変わったと思うこと」

- 前の自分は仕事に対して大変そうというイメージしかもっていなかったけれど、インターンシップをやってから仕事への興味のもち方がガラリと変わったので、もっといろいろなことを調べていきたいと思いました。
- 自分が興味のある分野以外の企業も、今回私が行ったインターンシップ先と同様にどんな技術や願いをもって仕事を行っているのか、という観点で見つめるようになった。年上の人と会話をするのが楽しくなった。
- 美術館の地域貢献の仕方、運営の仕方がわかった。屋外の企画展示の準備を行った時、地域と企業が協力して展示作業を進めていたのを見て、コネクションや力を貸してもらえるような誠実さをもつことの大切さを知った。一つの物事にも多くの人が関わっているのだと意識できるようになった。
- インターンシップ前は、単純な理由でこの職業になりたいって感じだったのが、このインターンシップをきっかけに、もっといろいろな職業を調べ、自分の興味関心のある職種を比較して自分にとって最適な選択ができるようになりたいと思えるようになりました。

職業観に注目して事後アンケート結果を見ると、本取組を通じて「社会へより関わりたいと思えた」「働くことが楽しみに思えた」「企業や仕事について、より調べてみたいと思えた」という回答はそれぞれ9割を超える。フリーコメントには、「仕事への興味のもち方がガラリと変わった」「どんな技術や願いをもって仕事をしている

かという観点で企業を見つめるようになった」など、仕事や働くことへの意識・見方の変化に言及する声が目立つ（図5）。本取組が職業観に好影響を与えていることがわかる。

「学校の成績では目立たない生徒が、生き生き取り組むことも珍しくありません。前任の教員の研究から、教科学力に表れる認知能力と、本取組に表れる非認知能力との間に相関が見られないという結果も出ています。本取組で自信をつけると、社会と関わっていくことを恐れなくなります。臆せず企業の方にメールを送り、依頼して断られることがあっても当然と受け止め、どこにでも飛び出していこうとする。肯定的な社会観が育っていると感じます」（森田先生）

インターンシップの経験は、2年次の個人テーマの探究活動につながる。2年生の浅香愛

佑加さんは、インターンシップ経験を基に探究テーマを「ノーマライゼーション実現のために私たちができることは何か」と設定し、活動中だ。「障がいやマイノリティに対する偏見は無知から生まれる。まずは知ることが大切」と考え、1年生に対して手袋をつけて折り紙を折るなどの体験授業の実施や、多様性を表現するマークをデザインしてステッカーを配布するなどの活動を行っている。将来は多様な子どもを支援する人になるのが目標だという（下コラム参照）。

インターンシップにこれほど力を注ぐ進学校は、希少と言えるだろう。その意義の大きさは、生徒たちの成長する姿が何よりも雄弁に物語っている。「教科の授業に重点を置く進学校ほど、この取組を行う意義は大きい」とし、同校は今後さらにこの取組を発展させていく方針だ。

## ＼ 生徒インタビュー ／

### 夢とロマンを守る仕事を通じ 学習の重要性や物の見方を学んだ



歴史が好きなことと教育の仕事への関心から、多胡碑という文化財の保護・管理施設でインターンシップを行いました。働く方のお話や発掘現場の繊細な作業の見学などから、地道な努力と時代を超えたチームワークで文化財が守られてきたことを知り、夢とロマンを後世に残す仕事なのだと思が躍りました。また、文化財保護の仕事に私たちが学んでいる数学や理科の知識を垣間見て無駄な勉強はないことや、歴史の多面性から物ごとを多面的に捉える重要性を学んだことも、大きな収穫です。（1年生・久保日菜子さん）

### ノーマライゼーションの時代への 期待と課題を考察



公認心理士の仕事に興味があり、心理相談室と児童発達支援事業所を自己開拓してインターンシップを行いました。今後、心の病や障がいをもつ子どもに対する公認心理士の需要が高まると考えています。すべての人が分け隔てなく生活を送るノーマライゼーションの時代に向けて、政府の支援や、多様性への理解者を増やす必要性を感じました。また、対面の直接的な対応を重視する両事業所において、SNSの普及や進化をどう活用していくべきなのか、新たな問いが生まれました。（2年生・浅香愛佑加さん）

Case

# 2

## 新しい技術にふれ、壁にもぶつかり、 仕事のリアルに迫る

世羅高校（広島・県立）

学校データ

1896年創立／普通科・農業経営科・生活福祉科／生徒数272名（男子153名・女子119名）、地域連携の教育活動を進めるとともに、海外姉妹校との交流や留学生受け入れて、国際感覚の育成も推進。

### 現場や最先端を知る社会人と 生徒たちが協働で地域探究

広島県立世羅高校は、普通科・農業経営科・生活福祉科のある学校だ。

以前から普通科では、町役場や観光協会と連携し、町の活性化を目指す探究活動を行ってきた。また、農業経営科では、世羅茶の栽培・収穫・商品開発に生徒が携わったり、広島市内で養蜂に挑んだり、地元産業と連携した学習も推進してきた。

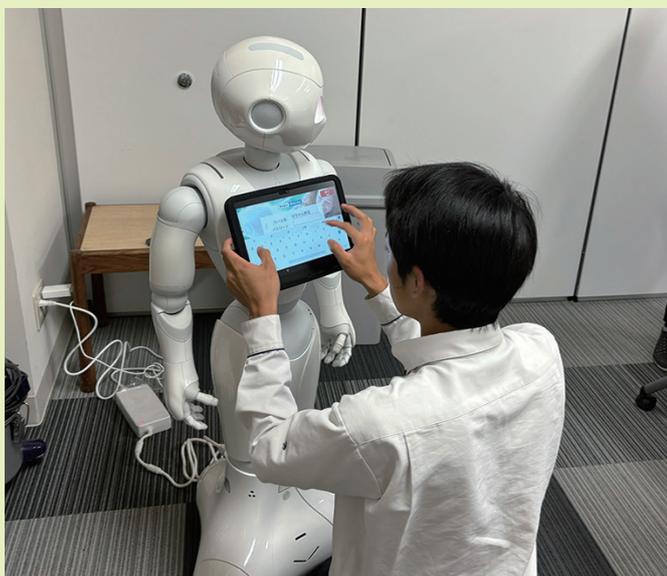
生活福祉科では、2022年より町役場および大手IT企業と組み、生徒が講師となり、地元の高齢者のスマホの悩み相談にのる会を実施、



左から、2023年度の総合的な探究の時間の担当の平山愛佳先生、2024年度担当の森由香里先生

大好評を博す。これを機に、世羅町と同企業は「デジタル人材育成とデジタル推進」で連携する協定を結び、スマホ相談会にとどまらず、世羅高校の生徒の日々の学習をICTの面でサポートする体制を整えていった。

こうしたなかで、同校は2年生の総合的な探究の時間のやり方を大幅に見直す。2023年



「福祉」を探究する生徒たちは、スマホ相談会を、企業の人から接し方を学んだうえで実施。「防犯・防災」および「歴史・地域資源」を探究した生徒たちは、公共の場でのAIロボットの活用を模索した。



度より、3学科の生徒が混ざり合っただけで協働で探究する形にし、進路希望別に分かれた10のグループで、地域課題の発見・解決にあたるようにしたのだ。そしてその活動に、各科が築いてきたコネクションを最大限に生かし、多様な外部の協力を仰いだ。生徒からすれば、産官学のさまざまな職業の人と協働しながら探究する形だ。

改革の初年度に、この探究活動のまとめ役

を担った平山愛佳先生は、一連の変化を前向きに捉えたという。

「以前に普通科のみで町の活性化の探究をしていた時も、生徒たちは最終的に町役場で具体的な提案をするところまでがんばっていたんです。ただ、本人たちの社会経験がまだ少ないこともあり、ネットなどで集めた情報を基にした、やや机上の空論に近い提案になりがちでした。その活動に地元の方や企業の方の目線も加われば、地域のために何ができるかを生徒たちはよりいろいろな観点から捉えて、考えを深めていけるのではないかと、思ったのです」

翌年の2024年度の探究活動を牽引した森由香里先生も、幅広い外部連携に手ごたえを感じたという。

「町のことに詳しい行政や事業者の方々と、新しい技術や視点をもつ企業の皆さんと、生徒たちがつながりながら、地域の課題と向き合う。そ



「地域商品」を探究した生徒たちは、ジャムやプリン、パン、猪肉などの地元の特産品について、生産者の元を訪れ、商品に込めた思いを聞き取ったうえで、ネット上のショッピングサイトで販売のPRをした。



ネット販売にあたり、IT企業の社員からWebマーケティングのことも学習。買いたいと思わせる表現や見せ方を学んだ。広く知らしめる重要性を知り、地元ラジオ局に自ら売り込んでPRした生徒もいた。

図1 探究活動における連携

主な連携先	主な活動(2024年度)
地元産業	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 食品開発</li> <li>● 観光イベント企画</li> <li>● 地域商品のオンライン販売</li> <li>● IT管理のスマート農業の実証</li> <li>● 観光施設へのAIロボット活用</li> </ul>
IT企業ほか 民間企業	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 防犯教室へのAIロボット活用</li> <li>● こども食堂(交流の場の創出)</li> <li>● スマホ相談会</li> <li>● 世羅町議会意見交換会</li> </ul>
自治体や大学	

うすると、今までにない新たな提案がいっぱい出てきたんですよ」

### ひりつく体験があるから 生徒の思考が深まっていく

例えば「地域商品」を探究したグループは、IT企業の社員が講師となる教育プログラムでWebマーケティングのことを学んだうえで、ネット上のショッピングサイトに販売ページを制作し、特産品を売ることに挑んだ。商品ラインナップでは、地元の道の駅や生産業者に協力を仰ぎ、彼らにインタビューもしたうえで、商品の説明や写真の見せ方を工夫してサイトでPRした。

「防犯・防災」を探究したグループは、世羅町や世羅警察署と連携し、地元の人向けの特殊詐欺防犯教室を開催することに。IT企業提供の別の教育プログラムでAIの活用を学んだので、防犯教室にAIロボットを使う企画を立案、当日の運用のためのプログラミングも行った。また、チラシを作って広報もした。

「保育・教育」を探究したグループは、地元事

業者で結成された地域貢献団体と、子ども食堂を開催。農業経営科の育てた野菜を使ったメニューを考案し、子どもたちが遊べるイベントも企画した。

「科学研究」を探究したグループは、地元事業者と、児童センターと連携。同センターで、小学生に対して理科の実験と蚕の生態調査を行う交流活動を行った。

こうした社会人との協働で、生徒たちは「自分の進路をより具体的に想像できるようになった」と平山先生は感じている。特に印象的だったのは、期待ほどの結果が出なかった体験を生徒が味わったときだという。どうすればうまくいくのか自問し、社会人からもフィードバックをもらい、「次はこうしたい」「ここが大事だとわかった」などと、その分野の仕事への解像度が高まったのだ。

「地域商品のネット販売に挑んだグループは、企業の人から学んだことを生かしてがんばってページを作ったのですが、簡単には売れない現実も知り、ならこうしてみようと試行錯誤を重ねました。デザインに興味のあった生徒は、その

体験から『人々のニーズを捉える重要性を学んだ』そうです。そして『地域に寄り添って地域に喜んでもらえるデザインをやってみたい』という夢ももつようになりました」(平山先生)

なかには、活動後に進路を見直す生徒もいる。保育士になりたいと思っていた生徒は、子ども食堂の運営に携わるなかで、幼い子たちと関わることの難しさを実感。もう少し上の年齢層と接することをイメージするようになり、スポーツの指導者を目指すようになった。そのように「向いていない、と気づくのも一つの学びであり、悪いことだとは思っていません」と森先生は言う。

## 世の中の仕事にふれることを 生徒と一緒に教員も楽しむ

また、多様な社会人と進める教育活動は、教

員にとってもプラスになる、と森先生は捉えている。

「私は20年近く教員一筋でやってきたので、『学校以外の社会を知らない』と言われることがあり、それが結構コンプレックスでもあったんです。この仕事にプライドをもって取り組んできましたし、私生活でいろいろな職業の人に会えば話を聞いたり、生徒の進路の参考になりそうな情報にアンテナも張ってきましたが、確かに、世の中の仕事について知らないことは多いですから。それだけに今、外の人と関わるなかで、生徒と一緒に私も学ばせてもらっているという感覚があります。例えば教員が意識しづらい『何のためにどうやって利益を出すか』といったことを。そうして自分の感じ取ったことも、進路相談や個別の授業に生かしていけたら、と思っています」

## 生徒インタビュー /

### 相手の立場になって考え 人を笑顔にするような仕事を



探究では「観光」のグループで、町の関係人口を増やすことに、町役場や旅行会社、中山間地域振興をする方々と挑みました。世羅町は陸上盛んなので、陸上教室を軸にいろいろな町の魅力を楽しめる宿泊プランを企画。

東京の移住フェアでチラシを配り、SNSでも募集しました。でも定員に達せず中止に…。後日、学校で陸上教室を開いた時に、参加者が楽しんでくれたのが嬉しくて、支えてくださった社会人の方々が「プランは相手の立場になって考えよう」「人の笑顔を見られるから、やりがいがある」と言われていた意味がよくわかりました。また自分たちで企画したいです。(普通科2年生・鈴木雄貴さん)

## 地域に根ざした仕事の工夫にふれ、 将来をより創造的に思い描く

那賀高校（徳島・県立）

### 学校データ

1948年創立／普通科・森林クリエイト科／生徒数167名（男子95名・女子72名）、志願者を全国から募集、遠方から入学した生徒は寮生活を送る。那賀町との連携や国際交流活動を推進。

### ステレオタイプではない 多様な働き方を知るために

森林が95%を占める徳島県那賀町。那賀高校はその町にある、森林クリエイト科と普通科からなる学校だ。

2016年に創設された森林クリエイト科には3つのコースがあり、伐倒や伐採をする「林業実践」、木材等の商品開発をする「地域資源」、木材加工や商品販売に挑む「木材加工」のいずれかを専攻する。木を切り、活用方法を考え、加工して販売するという産業の流れに沿うもので、同校の丸山 稔先生は「仕事の実践そのものを授業に組み込んだもの」と語る。

しかもその活動で、林業関連の地元事業者や町・県・国の職員とも協働するという。例えば、住宅地の育ちすぎた樹木が自重で折れたり電線にかかったりしないよう伐採するのを、プロの

管理の下で生徒が手伝う。さらに生徒が伐倒した樹木を使って、木工会社や木材チップ製造会社、製紙会社と協力し、木製の文具や遊具の商品開発にも挑む。また、校内の製材所に技術者を招き、あるいは事業者の設備を借りて、木工製品から、町の施設で使う看板やベンチまで製作する。そして全国のお店や地元のマルシェ、ネット通販サイトでの販売も。こうした実践的な学びを、各専攻の生徒が連携しながら行っているのだ。

一方の普通科も地場産業と組んだ教育活動を展開。2024年度からは探究活動やインターンシップをより地域密着で進めている。その理由を、繁田大地先生は次のように述懐する。

「生徒の頭の中にある『職業』といえば、飲食店や販売店の店員、研究所や工場で働く人、美容師など、身近に接点があるものやメディアでよく見るものがほとんどで、その枠内だけで進路を考えている生徒もいたのです。地域の中には、既存の枠を超えた働き方をしている人がいます。那賀町にも、捕獲した鹿や猪を調理・販売するジビエ料理の専門家や、標高1300mの山奥で宿を経営する方、乗馬やホースセラピーを手がける方などがいるんです。生徒が今ある知識だけでインターン先や進路を選ぶのでは



左から、みらい創造部（総合的な探究の時間やDX、地域みらい留学などを推進）の部長の繁田大地先生、「特殊伐採隊丸山組 組長」の呼称でも親しまれている丸山 稔先生

ダウンロード可

なく、地域の中に入って知らなかったことを体験し、『仕事ってもっと自由で、いろいろな働き方があるんだ』と感じながら進路を模索したほうが、未来の可能性が広がるのではないかと考えました」

## できることや挑みたい問題を 実体験から生徒が発見する

学んでいる生徒たちの意識は、特に入学当初は、千差万別だ。「林業を継ぎたい」「地域の中で学びたい」と、高いモチベーションをもった生徒がいる。一方で、勉強が得意ではなかったり、不登校を経験したりして、「この学校なら入れるから」と消極的な理由で門をくぐった生徒もいる。

しかし、不本意な思いを抱えた生徒でも、「学校の外にまで出て学ぶと、できること、やりたいことを見つけて、どんどん伸びます」と丸山先生は言う。今までの生徒の成長を懐かしむような笑顔で、そうした変化を生むと思われる要因も語ってくれた。

「一つは、林業や農業を通して自然を相手にする楽しさを実感すること。二つ目は、実践的な活動を大人と一緒にやるなかで『こんな仕事があるんだ』『こういう考えがあるんだ』と身をもって学ぶこと。三つ目は、自分のしたことで周囲から認められたり喜んでもらえたりすることです」

野球部があるからという理由で入学した生徒が、次第に林業実践にのめりこみ、成果を発

インターシップ報告書  
HRNO ( 2306 )

私は  
**徳島森林づくり推進機構**  
にインターシップに行きました。

私がこのインターシップ先を選んだ理由は  
昔から自然や重機が好きで、その色々な知識を学びたいと思った  
からです。  
そこで  
クワールという重機やプロセッサという重機に乗って  
木を叩いて運び  
などの仕事をしました。  
学んだことは  
重機の安全は操作の仕方や  
安全確認の大事で、人とのコミュニケーションが  
です。  
2日間を通しての感想は  
最初はとても緊張しました。でも、話していく内に慣れました。  
2日間通して学んだ事は、自然に慣れ重機の安全な操作の仕方です。  
1番は、コミュニケーションが大事だなと思いました。  
でした。  
1年生の皆さんへのアドバイスとしては、  
今からでも、人とのコミュニケーションが身につけることがすごく  
大事だと思います。

### インターンシップの振り返り

インターンシップの振り返りでは、どのような仕事をしたのか、そのなかで何を学んだか、どんなことを感じたか、といったことを言葉にして整理する。また、次年度に体験する1年生に向けたアドバイスも考える。

表する全国大会で文部科学大臣賞を受賞。大学に進学し、林業の後継者を育てる教員を目指すようになったこともあった。仲良し3人組が「僕らで林業の会社を興す」と言い出し、皆でより高度なことが学べる専門の学校に進学したこともあった。

「その3人は、出前授業やインターンシップで、大手から独立した30代の林業経営者と関わられたのが良かったのだと思います。仕事を創り出そうとする生徒まで現れるようになったのは嬉しかったです」(丸山先生)

ダウンロード可

※ダウンロードサイト：リクルート進学総研 &gt;&gt; 刊行物 &gt;&gt; キャリアガイダンス (Vol.454)



森林クリエイト科の活動。山の中での木の伐採、森林調査のためのドローン操作、木材を使った商品の開発や製作など、林業やその関連産業の仕事につながることを実践の中で学ぶ。



普通科の活動。野生動物によるジビエ料理を手がける会社や、地元の農作物による郷土食を製造販売する有志団体、那賀町から「木育」を発信する山のおもちゃ美術館などを訪問。

普通科においても、探究活動やインターンシップを通して、生徒の進路に対する考えが深まりつつある。

「那賀町はゆずの生産でも有名なのですが、収穫しきれず放置されるゆずも多く、土の劣化や、獣が集まる問題も招いています。そうした地場産業の実情を知った生徒たちは、地域資源活用を本気で考えるようになり、化学の授業でゆずから精油や染料を抽出する実験をしたときも、熱心に取り組みました。『サイエンスの力を、専門の研究所や大学の研究室などで働かなくても、地方でより自由な形で使えるようにしたい』という思いをもって、進学した生徒もいま



地域探究同好会やエシカルクラブなどの部活動でも、放置ゆずの収穫、環境配慮の消費を促すマルシェでの販売など、地域の未来を見すえた活動に取り組む。

す」(繁田先生)

## 生徒目線で活動内容を考え 生徒以上に現場を楽しみたい

生徒がやらされ感を抱かないよう、意識していることはあるだろうか。

丸山先生は事前のリサーチと打ち合わせを重視しているという。

「生徒はどんなことを知りたいか先に聞いておいて、協力していただく方を選び、打ち合わせをするんです。その必要性に気づいたのは、企業の方から『高校生は何を聞きたいんですか?』と問われてからでした。なるほどと思いましたね。私は『学校の立場』から活動を計画しようとしていたが、『生徒の立場』から考えるべきだったんだと。今は自分が生徒になったつもりで外部の

人と話し合っています。そうすると、活動当日も『会社は創業何年で』といった一般的な話ではなく、生徒が知りたかったことをどんどん語ってもらえるんです」

繁田先生は、生徒たちと地域に出向いたときに「自分が一番楽しそうにする」ことを大事にしている。

「本校には、学ぶことや人と関わることに自信をもてずにいる生徒もいます。そうした生徒が自分の成長を感じられるように『何かに取り組んで心が動いたらその感情を出していこう』とも伝えているんです。だから私も、実は初対面が苦手なんです。地域との関わりを楽しもう、と。『君たちより先生のほうが楽しんでいるから。それだけしか楽しめないの?』。そういう空気を、醸し出していけたらと思っています」

## 生徒インタビュー

### コミュニケーションを取りながら 自然との共存を考えたい



授業やインターンシップで、林業の現場にふれてきました。そのなかで、この仕事は自然と向き合うだけでなく、人と話し合っていくものであることを知りました。例えば「間伐による土砂崩れを起こさないよう、どの木を切ってどの木を残せばいいか」で意見を交わしたりするんです。もともと自分はコミュニケーションを取るのがそこまで得意じゃないと思っているのですが…ただ、自然との共存のために切磋琢磨するようにコミュニケーションを取るのは、やってみたら得意でした。(森林クリエイト科2年生・森本天海さん)

### 楽しいことを一緒に創るうちに 自分も地元で挑戦したくなった



地域探究同好会という部活動で、地域活性化をしているような方々と関わっています。流しそうめんのイベントをしたり、ゆず狩りをしたり、山奥で宿を経営する人を訪ねたり。この学校を選んだのは近かったからで、同好会に入ったのは部活動紹介を見て「楽しそう」と単純に思ったからでした。でも、地元のために活動する人たちを見て、すごくいいな、と思うようになって。だから自分も高校3年間でこれという道を見つけて、地域のために活動に挑戦していきたいと思っています。(普通科1年生・<sup>じょうほら</sup>熊原悠豊さん)